沼正三と天野哲夫
ある覆面作家の素顔をめぐって

鈴木真吾 *SUZUKI Shingo*

―― はじめに
1章―― 沼正三―ある覆面の夢想家
2章―― 天野哲夫―ある碩学の異端者
3章―― 匿名性と筆名をめぐって
―― 結論

【要旨】本論は『家畜人ヤプー』の作者であり、その全貌がいまなお明かされていない覆面作家沼正三と、1970年頃から沼の代理人として活動し、1983年に自身が沼だと名乗り出て以降も、沼との距離を注意深く保ってきた作家、天野哲夫に関するものである。
2008年11月30日に死去した天野が沼の本体だという意見が主流を成す一方、天野が沼の本体ではないという意見は今日においてもなお支配的である。しかし、本論は沼の真の正体を考察するものではない。元来、仮想の人格を持った架空の人物として設定されていた「沼正三」が、何故、現実に存在する一個人であるという前提で語られてきたのかという点を問題にしつつ、『家畜人ヤプー』の作者の正体をめぐる騒動であった1980年代初頭の「『家畜人ヤプー』事件」を中心に、沼という覆面作家を巡る議論がどのように展開されたかを論じると共に、体系的に語られることのなかった天野について、沼としての天野ではなく、沼と対位法を成す存在としての天野を論じていく。

――はじめに

沼正三は戦後最大の奇書と謳われる『家畜人ヤプー』の著者であり、今なおその全貌が明らかにされていない謎の人物として知られている。また、2008年11月30日、かつて沼の代理人として『ヤプー』に関する雑務を担当してきた天野哲夫は86歳で亡くなった。天野は1983年に自らが沼だと名乗り出た人物である。『ヤプー』が出版された当初から、沼の正体は天野だという憶測が飛び交っていたが、天野は名乗り出るまでそれらの憶測を肯定することも否定することもなかった。

一時は天野が名乗り出ることで、沼の正体を巡る議論には終止符が打たれたが、沼の正体が天野であるという説に懐疑を抱き、1980年代初頭の「『家畜人ヤプー』事件」で沼の正体だと断定された高等裁判所の裁判官（当時）倉田卓次こそが真の沼だという説が止むことはない。しかし、本論の目的は天野と倉田のどちらが真の沼かを判断するようなことではない。

沼の代表作である『ヤプー』に関する議論の多くは、沼という謎の作家に関する議論や言及を踏まえたうえで展開されてきた。しかし、本論では沼の正体に関する論争や議論をまとめ直し、当初から虚構の存在として構築

されてきた「沼正三」が、現実に存在する一個人として錯覚され、語られてきたのは何故かという点を考察していく。加えて、沼もまたテクストとして語りうる存在だということを、沼の正体に関して展開されてきたこれまでの議論を省みることによって、今後、非常に多面的な文脈を有する『ヤプー』を語る際に、沼の正体に関する議論に振りまわされることなく、『ヤプー』というテクストを純粋に論じていくための足がかりを提供していきたい。

1章――沼正三―ある覆面の夢想家（マゾヒスト）

――「沼正三とは、最初から仮構されたフィクション上の人格として設定されているのでありまさしくその人格は今も現存し生きてはいるが、生身の身体をもって現れ出る素顔の沼正三は実在しようもない。この沼正三のフィションと、『ヤプー』の仮構世界の強靭性は重要に関連しあっており、その均衡がこわれたとき『ヤプー』の神話もまた崩壊する。」[1)]

マゾヒストの幻想百科事典ともいうべき小説『家畜人ヤプー』が論じられる際、沼正三という覆面作家の神秘性に触れられることが通例である[2)]。SFに重点をおいて『ヤプー』を論じる巽孝之は、正体を隠しながら筆名で作品を発表してきたアメリカの作家に触れながら「『ヤプー』を語る試みにおいては『隠遁作家』というスキャンダル自体を回避するわけにはいかない。要因のひとつとしては、アメリカに比して日本では『隠遁作家』という不在の存在がかぎりなく不在に近いという現状が上げられよう。」[3)]と述べる。

最初の単行本が発刊された1970年や、後述する「『家畜人ヤプー』事件」が世間の耳目を引いた1980年代初頭では、覆面作家である沼の正体を巡る議論が世間を賑わせてきた。特に話題になったものは、『諸君！』1982年11月号に掲載された森下小太郎の記事が発端となり、沼の正体だと名指しされた倉田卓次が後年に「『家畜人ヤプー』事件」[4)]と名付けた騒動である。同事件は1983年、沼の代理人として活動してきた天野哲夫が沼だと名乗り出て、舞台裏について語ることで一旦の沈静化を見せた。

天野は名乗り出て以降も「沼正三」と「天野哲夫」という２つの作者名を使い分けてきた。しかし、沼の名義で2003年に出版した『マゾヒストMの遺言』以降、天野の名で出版された『禁じられた青春』の文庫版を沼の名義にするなど、天野は沼との距離を注意深く保ち続けてきた頃とは異なり、沼としての活動を積極的に行うようになった。

一方、沼の正体に関する議論の多くは致命的な誤解に気づくことがなかった。それは「沼正三」という筆名を用いてきた真の沼ともいうべき個人が、現実に存在するというものであるが、その誤解は沼という一作家が現実に存在しうる根拠を沼が提示してきたことや、沼の正体について語る論者の多くが、沼を現実の一個人として執拗に論じることで生じたものかもしれない。しかし、沼は実在する一作家、あるいは一個人ではないというのが本論における私の見解である――「沼正三」とは、仮想の人格を設定された、テクストの中を縦横無尽に暗躍する夢想家、あるいは「沼正三」という作者名を持つ人物、それ自体がひとつのテクストである。

沼が様々な版で出版された『ヤプー』に寄

せた「あとがき」や、『ある夢想家の手帖から』で記してきた文章の多くは、私たちが沼の人跡を追うための唯一の手段であり、私たちは沼の筆による「あとがき」や著作を通じることでしか、沼という人物の人跡に触れることが出来ないという現実に直面せざるを得ない。「テクストとしての沼正三」という見方は、そういった前提に基づいている。また、エピグラフに引用した一節にもあるように「沼正三とは、最初から仮構されたフィクション上の人格として設定されて」おり、沼が自らの人跡について語る数多くの挿話もまたフィクションであるが、テクストとしても機能しうる側面を持っている。沼は『ヤプー』という小説の作者でありながら、ひとつのテクストとして、文章を通じて私たちの意識の中に表象される人物である。

「沼正三」の由来とアマチュア性

後に謎の作家と称される沼正三は、『奇譚クラブ』1953年 4 月号に掲載された「神(ネクタール)の酒を手に入れる方法――芳野眉美君に――」[5]でその名を世に現した。翌月の同誌で沼はソフィア伯爵夫人の足舐め小説「マゾヒストの會」の紹介と解説を併記した抄訳を掲載し、同作の結部では次号から沼の連載が始まるという旨が記され[6]、6 月号より「沼正三だより」、「あるマゾヒストの手帖」といった連載が始まり、1956年12月号より『家畜人ヤプー』の連載が始まり、『ヤプー』の連載が中断されて以降の沼の活動としては、単行本化に際しての「あとがき」や、『ヤプー 完結編』、『集成 ある夢想家の手帖から』の編集や、「あとがき」の執筆などがあげられる。

また、「沼正三」という筆名は、ドイツ人エルンスト・ズンプに由来する――「ズンプ(Ernst Sumpf）はほとんど知られていないので、もう少し述べておく。彼は自身マゾヒズム研究家で、『マゾヒズムの空想体系』および『マゾヒストの研究』の 2 書を残した。いずれもマゾヒストやサディスティンの手記を蒐集したものだが、後者ではエビングやブロッホの著書にある症例名について、その患者の日記や書簡を入手して紹介しているので、原著者が公開をはばかって省略した部分を調べるのには便利な書物である。2 書共私家版しか出ていないし、ズンプ自身が専門学者でなくアマチュアであり、また手記の入手経路が記されていないのが多いという理由から、信憑性に疑問をいだく向きも多く、アカデミーの学者には従来一顧もされていないが、内容が内容だから、手記の入手経路など示せるわけではないので、私は多分にズンプに同情的に見ている。……（ちなみにSumpfは普通名詞としては『沼』の語義を持つ。著者のペンネームは、このアマチュア学者にあやかったものである)」[7]と沼は述べるが、「沼正三」が架空の作家である以上、筆名の由来とされている「エルンスト・ズンプ」もまた架空の人物かもしれない[8]。さらに、私たちがズンプの存在を証明するために用いることのできる手段は、沼や天野による言説の中で紹介されるズンプの著作の一節を引用し、紹介し、流用する程度のものしかない。

ここで、『ヤプー』が連載されていた『奇譚クラブ』の特徴についても触れておきたい。『ヤプー』を輩した『奇譚クラブ』は匿名の読者からの投稿を中心にした雑誌であり、「大阪の編集部は読者同士の文通の仲介もしてくれたので、M関係ではA（引用者注：天野哲夫)、MおよびF関係ではB（引用者注：森下小太郎）という文通相手を持つようになっ

た。」と倉田卓次が述べるように、編集部が投稿者間の文通を仲介し、文通者達が互いの関心や性癖、そして（当時は）余り知られていなかったマゾヒズムという逸脱的嗜好を語り合う機会を提供してきた。不特定多数の匿名者たちによって行われた手紙のやりとりの中から、沼の博学的知識や『ヤプー』が生まれたといっても過言ではないだろう。

そういった土壌から登場した『ヤプー』を「文学作品」だと断言し、沼は極めて文壇的な「作家」に相応しい人物だと断言することは適切であろうか。これは『家畜人ヤプー』を「文学作品」[9]として語るか否かの問題にも繋がっていく。

『ヤプー』の連載第一回目に付記された挨拶文の中で、「人に勧めるよりまず自分でと、とうとう家畜化小説を書くことになりました。（……）マゾヒストの自虐的空想を愛さぬ方は、不快を感じるだけでしょうから読まない様にお願いいたします。」[10]と沼が述べるように、『ヤプー』は元来「マゾヒストの自虐的空想」に胸を踊らせる読者に読まれることを想定してきた作品である。

天野は倉橋由美子の『ヤプー』論「神と人間と家畜」の、『ヤプー』は文学的基準に基づく審査の範疇に含まれる作品ではないという主張を批判し、「文学と関わりがあるかないかの資格審査そのものには興味はない。沼正三は作家という肩書きをもたない素人である。文壇的野心も完全にない。資格審査は迷惑である。（……）とにかく『ヤプー』は文学とは無縁の立場に最初から立ち、書かれた、ということを銘記していただきたいのである。」[11]と述べる。

とはいえ『ヤプー』の内容に深く踏み込みながら文学的要素[12]について議論する余地は多いにあるが、本論では沼の匿名性と代理人を務めてきた天野を巡る議論をテーマに据えているため、『ヤプー』の内容に関する言及は若干量に留めてある。しかし、沼の人跡に関する議論を展開する以上、『ヤプー』の連載と出版に至るまでの経緯をまとめ直す必要がある。

捕虜体験と『家畜人ヤプー』執筆に至るまで

『家畜人ヤプー』の中核を成す主題であり、なおかつ沼正三のマゾヒズムを特徴づけるものは白人崇拝[13]や、日本人としての下降願望（スクビズム）[14]である。「終戦の時、私は学徒兵として外地にいた。捕虜生活中、ある運命から白人女性に対して被虐的性感を抱くことを強要されるような境遇に置かれ、性的異常者として復員してきた。（……）祖国が白人の軍隊に占領されているという事態が、そのまま捕虜時代の体験に短絡し、私は、白人による日本の屈辱という観念自体に昂奮を覚えるようになっていった。」[15]と沼はマゾヒズムや白人崇拝への目覚めを回想する。

復員後の足取りに関する体系的な記述はないが、『ある夢想家の手帖から』には東中野に住む大学生であったこと、古書店のペーパーバックの山からSFを取り出して濫読する日々を過ごす中で、カレル・チャペックの『山椒魚戦争』に出会い、『ヤプー』の着想を得た[16]ということ、当時の沼が東京近郊を生活圏にしていることを示唆する記述が確認できる[17]。

沼は『奇譚クラブ』1953年４月号でその作者名を露にして以降、同誌1956年12月号より『ヤプー』の連載を開始する[18]。三島由紀夫は同誌で連載されていた『ヤプー』を愛読し、1959年頃、『ヤプー』を中央公論社から出版

するように天野を促してきた[19]が、1970年に都市出版社から単行本が刊行されるまでの間、『ヤプー』は様々な出版社の間を放浪してきた。

同誌での連載が中断された後、『ヤプー』は1969年の『血と薔薇』第４号にこれまで連載されてきたものの一部（3/4ほど）が掲載される[20]。また、三島の仲介によって、中央公論で企画が進められていた『ヤプー』の単行本は「『風流夢譚』事件」の影響を考慮したためか計画の途上で頓挫し、後に徳間書店で単行本の企画が進むが、検閲に関する見解の相違によって企画は立ち消えてしまう[21]。

徳間書店での企画が決裂した後、澁澤龍彦の紹介によって『ヤプー』の単行本は桃源社から発刊されるというかたちで話が進められていた[22]が、かつて『血と薔薇』の責任編集を務め、都市出版社を創設した矢牧一宏の熱心な説得に応じた天野は都市出版社との出版契約を交わすに至る[23]。そして1970年２月に『ヤプー』の単行本が発刊（同年7月に増補改訂版が発刊）され、天野や矢牧と共に『ヤプー』の宣伝や出版のプロデュースに関わってきた康芳夫によって様々な企画が催された。さらには都市出版社が右翼団体に襲撃された事件がマスメディアに報じられ、大衆の興味を惹きつけながら『ヤプー』の売り上げを牽引していった[24]。

主賓不在のパーティ、「ヤプーの館」、襲撃事件

『家畜人ヤプー』の出版記念パーティは1970年４月12日の深夜０時に、銀座のクラブで開催された[25]。天野哲夫は「このパーティの主催は《都市出版》というアールヌーボー派の出版社（……）本来の開催主旨は出版記念パーティなのであるが、不思議なことに、祝わるるべき作者は現われず、その上、来賓の祝辞なし、挨拶なし、いっさい、ないない尽くしの全く異例のパーティであった。」[26]と述べる。

出版記念パーティの数ヶ月後に開館した「ヤプーの館」は天野が立案し[27]、康がプロデュースを請け負った企画であるが、「ヤプーの館」は『ヤプー』に関連した企画としては珍しく、沼の正体を巡る議論とは離れた位置にあった[28]。これは「ヤプーの館」が女性解放区をテーマにし、男女の権力が逆転することを楽しむある種の社交場（クラブ）であったために、沼の正体の追求に関する議論が登場しなかった可能性があるが、スキャンダラスな話題――尿瓶を使ったビールジョッキ、口輪・首輪をはめられた男性の生体椅子など――が広まりすぎため、「『ヤプーの館』は、タレコミや何かで四谷署の手入れが重なり、程なく閉店を余儀なくされてしまった。」[29]。

次に、『ヤプー』にまつわる挿話として広く知られている都市出版社襲撃事件について触れておきたい。康は竹熊健太郎との対談において、『ヤプー』の日本人や日本史に対する被虐趣味に対し、愛国的な右翼が過激な抗議行動を行うという事件の捏造を宣伝用に企図していたが、本物の右翼が都市出版社を襲撃したと述べる[30]。事件は検事から康へ寄せられた示談の誘いを康が受け、賠償金を受け取り、逮捕された構成員が仮釈放されるという形で、襲撃騒動に決着が付けられた[31]。

一方、倉田は「『「家畜人ヤプー」の著者沼（マ）がいるか？』とその１人が叫んだのに対して、矢牧君が『あんたがた。「家畜人ヤプー」は三島由紀夫が褒めた本、絶賛した作品だということを知ってるんですか？』と問うと、『エッ！　三島先生が褒めた？』と態度が一

変、口吻が軟化し、結局知ってるのは本の名前だけで実際に読んだものはいないことが暴露されると、『明日また来るぞ！』と予告して引き上げていった。」[32] と襲撃事件について述べる。注目すべきは、襲撃事件では『ヤプー』の名前や日本に対する不敬といったスキャンダラスな要素のみが先行していたという点である[33]。

「『家畜人ヤプー』事件」——沼正三の素顔をめぐる騒動

三島由起夫を筆頭とした著名人の絶賛を受けたにもかかわらず、『家畜人ヤプー』の作者沼正三はその覆面を脱ぐことはなかった。さらに作者不在の出版パーティや代理人天野哲夫の登場など、『ヤプー』に話題が集まれば集まるほど、沼の正体に対する大衆の詮索熱も高まり、沼の正体を巡る推理ゲームが繰り返されてきた[34]。その代表としては、『諸君！』における森下小太郎の記事や、嵐山光三郎の「小説 沼正三」があげられる。同作を『風俗奇譚』1970年 7 月臨時増刊号に掲載した嵐山は、代理人として活動する天野に強い不信感を持つと共に、真の沼の存在を信じていた。「小説 沼正三」は『ヤプー』と天野の周辺に関わる実際の人物が登場する「何とも形容しがたいモデル小説で、話題性のみに限れば大変な傑作なのであるが、あまり話題にならずに読み捨てられた。」[35]。一方、『諸君！』1982年11月号に掲載された森下の記事は沼の正体を倉田卓次だと断定したものであるが、記事に対する各マスメディアの反応は賛否両論のある冷ややかなものだった[36]。しかし、森下は一貫して、倉田こそが真の沼であることに疑いはなく、代理人としてのみならず自らが沼として振舞おうとする天野への批判を展開する[37]。

沼の正体に関する根拠として、森下は沼との間で交わした文通や、沼と目された人物が森下宅を訪問し、アルフレッド・キントとエドワード・フックスによる 4 巻組みの共著『女天下』[*Weiberherschaft*] の、幻と言われている第 4 巻を一晩で読破したという挿話を提示し[38]、それが現実世界における沼と森下の初めての出会いだと述べる。そして、森下は1982年 9 月、東京高等裁判所の民事法廷の傍聴席で、かつて森下の家を訪問し、一晩で『女天下』の第 4 巻を読破した人物を裁判官席に発見した際の挿話を紹介し、同論を締め括る[39]。しかし、倉田は後年に森下の記述の虚偽を指摘し、倉田と天野の双方が『女天下』を 4 巻組で所持しているため、森下を訪ねる必要はないと述べる[40]。

『諸君!』同年12月号の記事においても、沼の正体は倉田であると断言し、沼を神格化せんとする論調にも変化はなく、「『沼正三』は日本文学史に異彩を放つ存在として残るものだと私は思っている。沼正三名で書かれた多くの作品について、どこからどこまでがあなたの手になるものか、それを判然とさせることもまた、あなたの読者に対する責務ではあるまいか。」[41] と森下は訴える。しかし、12月号の記事に対しては多くのマスメディアが沈黙を守っていた[42]。さらに、同誌1月号には三度森下の筆による記事が掲載されたが、その内容は森下と倉田の間で交わされた文通を白日の下に晒すといったもので、1 月号での論調はそれまでのものよりも弱々しくなっている。

倉田は、「『家畜人ヤプー』事件」について、森下によって引き起こされた騒動は裁判官であるよりも『ヤプー』という名作の作者である方が倉田にとっては名誉のあることだとい

うことに気づき、是非とも続編を書いて欲しいというものだったとまとめ、かつて天野が倉田の小説『レターM』を出版化したが、結果は返品の山だったということを暴露することで、以後の森下は沈黙を守っていったと述べる[43]。しかしながら、森下が『ヤプー』の内容に言及するより沼の正体が倉田判事であると強調する理由には、森下が官憲全般に対して抱いてきた、ある種の私怨があったことは否定できない[44]。

森下に扇動された「『家畜人ヤプー』事件」は、森下が倉田との文通の中で形成された理想の沼像を倉田に重ね合わせると共に、代理人として活動を行いながらも、自らが沼であるということを完全に否定することがなかった天野に対する苛立ちが噴出し、両者が絡み合ったことによって生じた事件だったとも言えるだろう[45]。

名乗り出た天野哲夫と『家畜人ヤプー　完結編』

沼正三の正体を暴こうとする覗き見趣味に対し、天野哲夫は倉田卓次に迷惑がかからぬよう[46]、『潮』1983年１月号に「天野哲夫（沼正三）」の名で掲載した「『家畜人ヤプー』贓物譚『諸君！』よ諸君、何ぞの愚昧なる！」で、ついに自らが沼だと名乗り出る――同論の中では、天野自身の筆で、沼や『ヤプー』を巡る謎や議論に対する種明かしや返答が数多く記されている[47]。

しかし、名乗り出て以降も、沼に言及する際に天野は「沼は……」という形で間接話法を用いてきた。これはあくまでも、沼の代理人としての立場を保持し続けるための戦略のようにも思える。その戦略は沼に関する架空の歴史や性格、嗜好などを維持し、沼の虚構性を保障し、天野が沼の虚構性に対して過度な介入を行うことを避けるためのものかもしれない。

『家畜人ヤプー 完結編』は、『S&Mスナイパー』に1988年２月号から1991年３月号まで、「続・家畜人ヤプー」のタイトルで連載されたものを単行本として編纂したものである。沼は最終回が掲載された1991年３月号に、「連載を終えて」という短文を記す――「『ヤプー』は、最初から、あまりにも伝説に取りつかれておりました。第一、初掲載誌の《奇譚クラブ》そのものが伝説的な雑誌でありまして、常連の執筆者諸士のほとんど、ペンネームというより匿名の覆面作家というわけで、筆者当人の素顔は編集者自身にも分からんことで、これは沼正三に限ってではなく、全員がそんな事情を抱えとりました。何せ、全員が、そりゃ人に言えぬヘンタイでございまして、今のように、大手を振ってSMだのSMF（引用者注：サド、マゾ、フェチ）だのと口に出して言うことなど、とんでもない時代で……それはそれは厳しい、我らの冬の時代でございました。」[48]。また『完結編』の「あとがき」では、「本書を送り出すと同時に、執筆のため作成したイース史年表を破り棄て、沼正三という名と共に用いたペンを折り、この文体とも永久に決別して、今後の一切は、形影相伴う（正編あとがきでもこう書いたのに、読めぬ人が多く、関係のないK氏に迷惑をかけたので、もう一度強調しておく）友人天野哲夫君に委ねることにする。」[49] と記していた。

とはいえ、『完結編』以降も、正編（都市出版社・角川文庫版）と『完結編』を合冊し、上・中・下の三分冊に編集しなおした『家畜人ヤプー』（以下『最終版』）[50]、『最終版』を５分冊にした『アウトロー文庫版』など、止まぬアンコールに応えるように『ヤプー』は

復刻し、沼はその都度新しい「あとがき」を記し、『アウトロー文庫版』のあとがきで「何故か『これが最後』とうたいながら、またまた新たに活字を組んでもらう機会にめぐまれた。今度こそほんとの決定版にしたいと思ったが、十分に直せなかった。(……) 例により康芳夫氏にお世話になったことを明記し、形影相伴う天野君と並んで深く謝意を表わす。」[51] と述べ、今度こそ表舞台から姿を消すと思われた。しかし、『マゾヒストMの遺言』の「『家畜人ヤプー』について」の中で、舞台の袖から三度その姿を現した沼は、「なおここに『家畜人ヤプー』を論ずるのは、これを最後の遺書のようなつもりでこの作品に愛着と未練の丈をこめ、惜別の詩(うた)をうたってみたいと思う。」[52] と述べ、再度『ヤプー』を論じる気になった動機のひとつとして、詩人かつ翻訳家の矢川澄子の自死を述べる[53]。

また、倉田は、『マゾヒストMの遺言』に言及する中で、三島由起夫の中に潜む自虐心理が『ヤプー』の構想に大きく関わっていた可能性を考察する[54]。『ヤプー』は三島によって見出され、単行本が発刊されて以降、謎の覆面作家たる沼と共に多くの伝説や神秘性を付与されてきた。だが、『奇譚クラブ』に投稿を続けてきた多くの匿名者たちが沼のような神話性を付与されることや、その作品に『ヤプー』のような伝説を付与されることもなく、さらには作者の匿名性を暴こうとする大衆やマスメディアの覗き趣味に巻きこまれることもなかったという点を顧みるに、『ヤプー』はかの三島が絶賛し、覆面を被った匿名の作者は三島の絶賛という光栄を賜りながらも、頑なに覆面を脱ごうとしなかったことが、『ヤプー』と沼の神秘性や伝説を高めていったのだろう。

もっとも、沼の正体を巡る議論の多くが、『ヤプー』を理解するうえで重要な副読本となりうる『ある夢想家の手帖から』に言及してこなかったことは、あの三島が絶賛した、あの『ヤプー』の著者である、あの沼正三という色眼鏡を通した形でしか、沼という人物や、テクストとしての沼が語られてこなかったことを暗示している。

本論の目的のひとつが、「テクストとしての沼正三」という視座を提供することにあることは冒頭で述べたが、もうひとつの目的として、かつては沼の代理人として活動し、自身が沼だと名乗り出て以降、沼の名の下にその存在が統一され、体系的に語られることの無かった天野の思想や実践に関する情報をまとめ直すというものがあるため、次章より天野哲夫について述べていきたい。

2章――天野哲夫―ある碩学の異端者(マゾヒスト)

天野哲夫 (1926-2008) は、1970年頃から沼正三の「代理人」として表舞台に姿を現し、後年には自身が沼だと名乗り出た実践的なマゾヒストであり、数多くのエッセイや評論を記し続けてきた作家でもある。しかし、天野の死去を伝える新聞の報道では沼の正体が天野と断定せず、曖昧な語り口になっている[55]。

天野は1926年 3 月、福岡県の幸袋に生を受け、福岡商業学校卒業後に満州の満州特殊鋼鉄株式会社に就職し、満州の熱河へ渡る。徴兵に伴う帰国後、佐世保警備隊世知原分隊に所属し、福岡で 8 月15日を迎える。そして戦後、天野は肺結核で療養生活に入るが、1949年に家族を追って上京し[56]、再度の療養生活を送りながら『奇譚クラブ』を筆頭とした風俗雑誌に原稿を投稿して生活費を稼いできた。

沼が『奇譚クラブ』に登場してから4年後、天野は筆名のひとつ黒田史郎の名で、同誌1957年10月号より「マゾヒズムへのいざない」を連載する。以降、複数の筆名を使い分け、『裏窓』や『あまとりあ』、『サスペンス・ミステリアス・マガジン』、といった雑誌で連載を続けてきた。

1967年に新潮社に中途入社し、編集者として活動してきた天野は本業の傍らで複数の筆名での連載を続けつつ、『ヤプー』の単行本（都市出版社）が刊行される1970年頃から、沼の代理人としての活動を開始する。1992年に新潮社を定年退職して以降も、天野は作家としての活動を続け、「続・家畜人ヤプー」が連載されていた『S&Mスナイパー』に、エッセイを連載[57]する他、評論集『我が汚辱の世界』や、『女性幻譚 骷髏（クウロウ）』、『犬になった老人の死』といった小説など、常にマゾヒズムを主題とした作品を発表してきた。

沼の名で発刊された『マゾヒストMの遺言』以降、かつて天野の名で発表された作品が沼の名で復刊されるようになると、天野の存在は沼の名の下に統一される。そして、連載エッセイの一部や、インタヴューなどを収録し、志賀信夫による序文や書き下ろしの沼論などを加えた『懺悔録　我は如何にしてマゾヒストとなりし乎』が2009年 5 月に発刊された。同書に収録されたインタヴューは、沼として取材に応じたものとして2006年に発表されている[58]のだが、それ以外はすべて天野の名義で発表されたものであるにも拘わらず、著者名はなおも「沼正三」である。また同月には天野の著作『異嗜食的作家論』が復刊される。しかし、同書には沼の名義で発表した文章は含まれていないのだが、名義は天野から沼に改められている[59]。

天野の名義で発表されてきた作品を沼の名の下に再編することは、「天野哲夫」という作者名や、その著作を沼の下に統一しながらも、テクストとして構築されてきた沼の神秘性の多くを破壊してしまう可能性がある。さらには、その半生について数多くのことを語る天野の著作を沼の名義にすることは、沼が現実に存在する一個人であるという錯覚を強めてしまう。

マゾヒストであることの自覚

天野哲夫は自らが抱き続けるマゾヒスト（ア）（ブ）的な嗜好を実生活で確認し、それを治療すべく様々な実践に挑んできた[60]。そして、その嗜好を恥じ、正常（ノーマル）な嗜好を持つことを願った天野は1956年前後の頃[61]に、性科学者高橋鐵の下を訪れる。

しかし、高橋は「『君は、その異常を治したいと口では願っているが、ほんとうは治したくない、治りたくないと思っているんでしょう、いいじゃありませんか、それで。治す必要なんか少しもない』」[62]と述べ、天野は「私の一通りの話を聞き終わってあと、しばらくしてから、考え考え、鐵氏はそう言った。（……）そうだ俺はマゾヒスト以外の何者でもない、と肯定的な自覚を持つようになる30代以後の私への、第一の扉が、鐵氏の一言で開かれたのは事実である。」[63]と、マゾヒストとしての自覚を強固なものにする。

個人としての天野が、匿名の集団によって構築された「沼正三」から分離し（もちろん沼正三に関わりながら）、黒田史郎の名で「マゾヒズムへのいざない」を発表したのが1957年であることを考えると、高橋の助言が、マゾヒズムに関する天野の探求心を後押ししたのは間違いないだろう。次に、一部が『家畜

人ヤプー』に連なる天野のマゾヒズムについて述べていきたい。

天野のマゾヒスト宣言（マニフェスト）
——下降願望（スクビズム）、女主人崇拝（ドミナ・ワーシップ）、対象神格化（アポテオーゼ）

下降願望（スクビズム）は、自らを下位の存在に貶めることによって、相手にサディスティックな支配欲を想起させる。特に、天野哲夫は知愚を演じて女性に馬鹿にされ、子供や動物のように扱われることに悦びを見出してきた[64]。また、下降願望（スクビズム）、女性崇拝（ドミナ・ワーシップ）、対象神格化（アポテオーゼ）は各々が個別の概念ではなく、数多くの共通点を持っている。三者が結合した例について、沼は「マゾヒズムとは、女性に支配される無力感に屈辱の喜びを感じることであり、女性にdomina（ドミナ）即ちmistress（ミストレス）を見ることである。幼児は母親に対して無力である。母はドミナである。生徒は女教師（ミストレス）に支配される。彼女は文字通りドミナである。（……）黒田史郎氏のように知愚者を装う一派も、これ（引用者注：小児科倒錯）によって相手の女性を指導的ないし侮辱的に行動させるのが狙いだから、やはりドミナを求めているといえる。」と述べる[65]。

倉橋由美子は天野をモデルにした「マゾヒストM氏の肖像」[66]の中で、「マゾヒズムの関係は本質的に2人の（マ）人間の想像（マ）力の劇ですから、本来それは、たとえばあなたと私のように、対社会的には普通の人間である者同士が想像力を駆使して社会的な顔をはぎ取り、一方は女神あるいは女主人に、一方は奴隷、白痴、あるいはその他の人間以下のものになって、それぞれの役割が意味するものを論理的極限にまで追求すべきなのです。」[67]と、マゾヒスト宣言（マニフェスト）をM氏に語らせる——「人間以下のものになって、それぞれの役割を追求すべき」という点を例証してみせた例は、『家畜人ヤプー』の中にも数多く登場する[68]。

女主人崇拝（ドミナ・ワーシップ）は下降願望（スクビズム）と同様、天野・沼の両者に共通している。沼は女主人崇拝と対象神格化を絡めながら「恋愛感情は相手を理想化する。これは普通のことであるが、マゾヒストの場合は極端な対象神格化を生じ、その結果汚物嗜好を生じるのであると考えられる。対象神格化（アポテオーゼ）（Apotheose）とし、相手を女神のように崇拝することである。その反射として自己卑下に陥る。両者は盾の両面である。」[69]と述べ、天野は倉橋との交流を下地にした「K女史の肖像」の中で、「ほとんど同世代のこの二人（引用者注：倉橋由美子／Kと大江健三郎／O）は、男の悲鳴と女の貪婪さを特徴的に分けもって、好んでよくセックスを主題とした。男の観念的世界は、しかし虫けらの観念にすぎず、それは天からの恵投の才は女性のみが持つ、というぼくの天性的信仰を裏付けるように、圧倒的にK女史の肖像は毛皮をまとったヴェヌスさながらに、イメージはひとり強大にぼくの内部で育った。」[70]と、才女（ヴィルトゥオーサ）としての倉橋を称え、崇拝の念を呈している。

マゾヒズムの大家（ヴィルトゥオーソ）、レオポルド・フォン・ザヘル=マゾッホが『毛皮を着たヴィーナス』などの諸作の中で、女主人崇拝（ドミナ・ワーシップ）と対象神格化（アポテオーゼ）を描いてきたことは広く知られているが、沼は「『毛皮を着たヴェヌス（マ）（マ）』があまりにも喧伝されて、マゾヒストの理想の女性像がヴェヌス（ヴィーナス）なのだ、とされていることには少々異論がある。——マゾヒストのドミナとしてはヴェヌス以外にももっとふさわしい女神があるのだ。」[71]と述べ、「パリスの審判」を例に出し、アフロディテを選んだパリスの審美眼は一般的なものであり、ヘラを選ぶ者は奴隷や召使いと結びつけられ

る女主人の崇拝者であり、アテネに象徴される女の雄武を選ぶ者もまた、ヘラと同様マゾヒスティックな嗜好を持つと述べる[72]。

天野の場合、倉橋に対する崇拝例に見たように、白人女性にこだわらず、ヘラやアテネ的な要素を持ち合わせる様々な女性に向けられている。これは白人女性に対する無条件降伏と服従を根底のテーマにしてきた『ヤプー』や沼のマゾヒズムと、天野のマゾヒズムの間にある大きな相違点だろう。

沼と天野のマゾヒズムが異なる原因として、下降願望（スクビズム）を抱くに至った契機の相違がある。沼は捕虜体験における白人崇拝や対象神格化（アポテオーゼ）を通じ、日本人の身体を卑下し、下降願望（スクビズム）へと到達した。女主人崇拝（ドミナ・ワーシップ）の点で、沼と天野は共通点を持っているが、天野には沼を特徴付ける白人崇拝が欠けているが、天野の下降願望（スクビズム）は沼のそれとは異なり、出身地でもある九州の慣習への抵抗によるものかもしれない[73]。さらに、天野のマゾヒズムには埴谷雄高の「自同律の不快」にも似た、日本人であることに対する厭世的な感情があるようにも思える。

埴谷は「自同律の不快」という観念を得るに至った理由として、「植民地にならなかったら日本は逆に植民地支配に加わる。いちばん後からだったので、台湾は、初めのアフリカより幾分いいと言えるでしょう。しかし、奴隷支配に近いですね。人力車によって『左へ行け』と言って、大人たちは車夫の頭をボーンとける。ぼくは子供ながらそれを見て日本人が嫌になってしまった。」[74]と述べる。埴谷の体験は台湾におけるものだが、満州で同じような光景を幾度も目にしてきた天野は「力強き民族は被征服の力弱き民族に対して支配的（サディスティック）となり、弱きは強き征服民族に対して隷従する（マゾヒストとなる）、ここには秩序が成立するのである。ぼくが多数派より少数派、孤立せる側へより強く共鳴する性癖を育てたのは、やはりこのような時代においての日本の青少年でありながら、マゾヒストであるという最大矛盾に生きなければならなかったことも、大きな要員をなすものと考えられる。ぼくにおけるマゾヒズムは、弱き側ではなく、強きが弱きに隷属する逆説（パラドックス）であり、秩序を倒立させ無力化させてしまう冷笑主義を孕むことで反民族的になってしまうからであった。」と述べる[75]。

埴谷の「自同律の不快」は、男女を問わず日本人であることそれ自体に対する不快感であるが、天野のそれは日本人であることよりも、戦前ならびに戦時中に、虚栄や強がりを見せ続けてきた日本人の男であることに対する不快であり、天野の描く敗戦直後から占領期にかけての光景の多くは、占領軍に頭を垂れる元日本兵の零落した姿である[76]。

1991年３月、『S&Mスナイパー』に連載されていた「続・家畜人ヤプー」の連載が終了し、同年12月に『家畜人ヤプー　完結編』として単行本化された後、『最終版』（1993）、『アウトロー文庫版』（1999）として『ヤプー』が再刊されたことについては前述の通りである。そして2003年には『マゾヒストMの遺言』が発刊され、2008年には、天野の半自伝的小説『禁じられた青春』の文庫版が、『アウトロー文庫版』と同様、幻冬舎から発刊されるが、著者名は「天野哲夫」から「沼正三」に改められている[77]。

文庫版『禁じられた青春』の序文において、沼は「三島由紀夫、澁澤龍彦両氏の、特に三島氏の強力な推輓により、沼正三名義で『家畜人ヤプー』を「都市出版社」より上梓したのが1970年、ほぼ20年遅れでその『完結編』

を「ミリオン出版」から公刊したのが1991年、それとほぼ同時併行するが如くに、今度は天野哲夫の実名で発表したのが「葦書房」による本書『禁じられた青春』です。同じく1991年のことでした。くだくだしくは申しません。まずはお目通し下さらんことを。／以上、両書とも私の最も愛着なるものを感じます。よろしく御判読賜らんことを。」[78] と述べ、著者名を沼に改めた経緯についての説明を避けるが、その曖昧な語り口は、説明不足から生じるであろう批判を待ち受けているかのようである。最後に、作家の匿名性や筆名の効用、そして沼の代理人という、些か奇妙な立場を取り続けてきた天野の戦略や「テクストとしての沼正三」について述べていきたい。

3章――匿名性と筆名をめぐって

何故、人は筆名を用いるのか。そして筆名を用いる作者の正体を知ろうとする欲求を、作者がその姿を隠そうとすればするほどに膨らませていくのか。この問いについては様々な意見が向けられることだろう。例えば、巽孝之が沼正三の匿名性を論ずる際に名をあげたトマス・ピンチョンは、匿名ならではのトリックを、『ヴァインランド』に織り込んでいる[79]。また、ジェイムズ・ティプトリー・ジュニアは、女性という素性を隠すために男性的な筆名を用いているが、読者や評論者はジェイムズ・ティプトリーという男性名と、その男らしい（ハードな）文体や作品から、各自のティプトリー像を作り出してきた。

「ティプトリーが女性ではないかという説も耳にするが、この仮説はばかげていると思う。なぜなら、ティプトリーの書くものには、なにか逃れようもなく男性的なものがあるからだ。男にジェーン・オースティンの小説が書けるとも思えないし、女にアーネスト・ヘミングウェイの小説が書けるとも思えない。それと同じ意味で、ジェイムズ・ティプトリー作品の著者は男性だと、私は信じている。」[80] と、ロバート・シルヴァーバーグは述べる。これはティプトリーという作者名を付与された作品を通じて、シルヴァーバーグの中に表象された、ジェイムズ・ティプトリーという男性作家の理想的な姿である。

シルヴァーバーグは「ジェイムズ・ティプトリー像――それはおそらく50代前半の男性、たぶん独身で、野外生活を好み、毎日の生活に落ち着けないものを感じ、この世界の多くのことを見聞してきて、それをよく理解している人物だ。もちろん、これらすべては、おもにファンタスミコム誌の記事と、ティプトリーからときどき届く手紙と、彼の作品そのものにもとづいた、たんなる仮説にすぎない。」[81] と述べるが、彼の語り口は、森下が沼について語るものと重なる部分が数多くある。もっとも、森下の場合は倉田に、自らが沼であると認めさせたいという意識や、代理人以上の存在として振る舞おうとする（と森下の目に映った）天野に対する批判などを考慮すると、森下はティプトリーに対するシルヴァーバーグの思い入れ以上に複雑な感情があったことだろう[82]。

接続された男――代理人卑下意識の悦び

ジェイムズ・ティプトリー・ジュニアの「接続された女」は、美しい容姿を持つロボット、デルフィを遠隔操作するための遠隔操縦者（リモート）として、一人用のサウナのようなキャビネットに入り、身体に様々な配線を接続された女、オーク・P・バークとデルフィを中心にした

物語である。P・バークは醜い容貌を苦に自殺を企てるが未遂に終わり、病院で瀕死の状態だったところを電脳系の候補としてスカウトされる。P・バークはある種のゴーストアクターを演じるのだが、その存在は公にされず、接続された「女」をP・バークとして認識しているのはペンシルヴァニア州カーボンデールの地下150メートルにあるGTX社の脳神経研究所の関係者のみである。

社会からその存在を末梢されたP・バークは、デルフィを操る遠隔操縦者（リモート）としての役割を課せされてはいるが、事実上デルフィと一心同体の状態にある――「P・バークと呼ばれる生き物が地下に取り残されたままだという事実は、なんの関係もない。P・バークはまったく自意識がなく、貝殻に包まれたハマグリのように幸福だ（……）。しかも、P・バークはキャビネットの中にはいない。P・バークは、いま美しいコロラドの保養地に着き、航空バスから降り立つところ、そして彼女の名前はデルフィだ。」[83]。

デルフィとしてテレビ番組への出演を中心にした活動を続けるうちに、P・バークは自分とデルフィの間にある境界線を消失する[84]。そして、デルフィに恋をしたポール――P・バークも、彼に恋をする――は、デルフィが遠隔操縦者（リモート）を介して動くロボットであることに気づき、接続された女を救うため、デルフィを連れてGTX社の研究所に侵入するが、キャビネットのある部屋に入ったポールを待ちかまえていたのは、キャビネットに接続されたP・バークであり、彼は寄り添おうと近寄ってきた彼女に接続された配線をなぎ払ってしまう[85]。

デルフィ代理人P・バークは、デルフィとの一体感を得すぎたために、代理人としての自意識を消失し、ポールは、デルフィという覆面の下に接続された、愛する女を自由にしたいという、愛情と正義感の入り交じった衝動によってデルフィの虚構性を打ち砕くばかりか、P・バークをも殺めてしまう。このデルフィとポールの関係は「『家畜人ヤプー』事件」における、沼正三と森下小太郎の関係に似ており、もちろんティプトリーとシルヴァーバーグの関係にも類似している[86]。

天野哲夫が名乗りをあげるまで、「沼正三」は「接続された女」におけるデルフィや、ウイリアム・ギブスンの『あいどる』に登場する電脳〈あいどる〉「投影麗（トウ・エイレイ）」のような存在であり、天野は「沼正三」というテクスト世界における博学のマゾヒストを、その世界で暗躍させるため、「沼正三」という名の「あいどる」に接続された代理人であった。デルフィに接続されたP・バークが、自らの仕草や表情の変化をデルフィに伝達してきたように、天野は沼をテクスト世界で活動させるため、原稿用紙にペンを走らせ続けてきた。

天野は「私の経歴は漠としてとらえどころがない。曾て一時期は、誰も検索出来得ぬ靉靆（あいたい）たる彼方に霞み去っている。つまり、私はいかがわしい人間なのである。ニセモノにふさわしい人間である。ニセモノとしての侮蔑を身に受けるは、マゾヒストとしての立場からはこれが一種の法悦ともいえる。」[87]と、沼を装うことへの批判に対峙する際の姿勢を述べ、ゴースト・ライターをテーマにした松本清張の小説『蒼い描点』に触れながら「令名高き女流作家が、実はひとかけらの文才もなく、実作者は芝居の黒子のように、黙々と人目に触れることもなく完全に陰の人として生きる、見た目に見すぼらしい男であった（……）その黒子のような顧みられない陰の

男の立場は、強烈な憧れを誘う。才能も生活も、丸ごと女に吸い取られ、その生きる肥料としての生涯を終える立場は、明らかにマゾヒズム的法悦の特権ではなかろうか。(……)私はこの陰の代理人の卑下意識に憧れた。」[88]と述べる。

「接続された女」で、デルフィを操る遠隔操縦者の役割を担わされたP・バークは、デルフィの代理人であるといえる。しかし、P・バークの意志に基づいて駆動するデルフィもまた、P・バークの代理人（代理物）の役割を担うという表裏一体の関係にあり、デルフィが称賛を受ければ受けるほど、P・バークはその称賛が自分に向けられたものだと錯覚し始める。しかし、沼と天野の関係はデルフィとP・バークのものとは異なり、天野はあくまでも沼や『家畜人ヤプー』に対する称賛は「沼正三」という謎の人物が受けたものであり、自身はあくまでも「沼正三」という存在を駆動させるために接続された代理人にすぎず、「沼正三」を気取る贋者呼ばわりされることに楽しみを見出している。

「汚辱の世界を作る」——匿名性と「大人のアソビ」

「私のペンネームが４つ５つありながら、当人は実は１人というのと、ただ１つの沼正三のネームに、実は４つ５つの、あるいはそれ以上の人格が蔵されていた」[89]とは、名乗りでた折に、天野哲夫が記した一節である。天野が複数の筆名を使い分ける際、そこにはひとつの特徴がある。それは筆名をひとつの人格として想定し、各々の人格に応じたスタイルの作品を書くというものである[90]。さらに興味深い点として、各人格が互いの作品や議論に対して言及を行うということがある——ここには天野のみならず、沼すらも含まれている。

個別の人格が、同じ性癖を共有する同志に対して、テクストを通じて言及し合う行為によって、テクスト上に、あるいは読み手の中には、ある世界が形成される。その世界において、彼らは実在の人物の筆名ではなく、個別の嗜好を持ったマゾヒストとして、読み手の中に表象される。もちろん、沼や（テクスト上の）天野もまた、そのテクスト世界ないしは「汚辱の世界」で筆を走らせ続ける夢想家である[91]。また、この「汚辱の世界」は筆名氏らが匿名性を保持することで、奥行きや深みを増し続けていく神話的な世界でもある——「隠遁もまた沼正三的な修辞法の一部であり延長」[92]だと巽孝之が沼の匿名性の持つ機能を指摘するのと同様、私が指摘する「汚辱の世界」もまた、沼的な「修辞法の一部であり延長」であろう。

天野は匿名性を保持することによって可能となる修辞法について、「K氏は、しかし前述のように連載に先立ち『ヤプー』の内容とそのストーリーの展開について、あらかじめ知っていた数少ない人の１人である。その知識のもとに、真面目らしい文章を森下君とかわした、といったことを座興として聞いた記憶がある。私も便乗して何通か、ほかにも１人、森下君へ通信をよこしたはずである。これはだが、これこそがダマシ絵のような大人のアソビというもの。ところが、マジメな森下君には、沼正三の本体について、かなりの錯乱を呼んだようである。思えば気の毒なことをしたと反省するが。」[93]と述べる。K氏や、沼に関わってきた匿名の夢想家たちもまた、「大人のアソビ」によって構築された「汚辱の世界」を維持し、拡張していく営みに手を貸してきたのだろう。

「あとがき」と沼正三

『家畜人ヤプー』の本編の中にはテクストとしての沼正三を見出すことはできない。それは『ある夢想家の手帖から』における沼の私生活に関わる挿話や、様々な版で出版された『ヤプー』の巻末に付された「あとがき」、真の沼について数多くの人々が記してきた言説の中に、それは見出しうるものである。

沼が初めて記した『ヤプー』の「あとがき」は、『改訂増補限定版』に寄せられたものである――「初版本が好評で数刷を重ねた。全改訂版の豪華本を作るから、今度こそ自跋を書けと、代理人M君の厳命である。（……）沼正三死亡説もあるそうだから、本人にしかできない古い話から始めよう。」[94] という書き出しで始まるこの最初の「あとがき」では、沼の捕虜体験や『山椒魚戦争』に影響された『ヤプー』の構想、そして執筆に至る経緯などが記されている。

『ヤプー』に関する沼の「あとがき」は、他に『限定版』と同内容の『普及・改訂版』、『角川文庫版』、『限定愛蔵版』、『完結編』、『最終版』、『アウトロー文庫版』があり、この他『改訂増補復刻版』の「はしがき」などがある。また、『ヤプー』の各版に添えられた「あとがき」と、『ヤプー』以外の作品における「あとがき」を比較するならば、『ある夢想家の手帳から』や『集成「ある夢想家の手帳から」』における「あとがき」が、作品の趣旨や出版に当たっての特記事項や復刊に至る経緯などが記され、テクストとしての沼よりも、書物の内容や編纂に関する言及が多いのに対し、『ヤプー』の「あとがき」では、テクストとしての沼や、「『家畜人ヤプー』事件」、そして当時の社会情勢について言及するという差異がある[95]。

天野は『限定愛蔵版』の「あとがき」に「追記」として「『あとがき』も、また小説の一部であり延長であると私は考える。ところが年表や史書のように大真面目にとられすぎての一波乱が起きた。」[96] と述べ、名乗り出た『潮』1983年1月号などを参照することを勧めている。「一波乱」は「『家畜人ヤプー』事件」を指し、同事件は述べてきたように、沼の正体を詮索する人々が真の沼たる一個人が現実に存在するという錯覚に囚われていたことや[97]、事件を煽ってきた森下小太郎が真の沼だと主張してきた東京高裁判事（当時）倉田卓次に対する執着によって引き起こされたものである。また、名乗り出た後の天野は『劇画　家畜人ヤプー最新版』の冒頭に寄せた文章で、「私は或小説の構想を温めていた。仮説人格の創造が成功してみると、急に意欲が高まり、その構想を骨組みし、肉付けし、ストーリーの展開を語らい、血を通わせる上での知人もある。学識豊富なK氏もその一人であった。（……）贅言重ねる余白がない。実の作者であることを名乗らざるを得なくなさせた『諸君！』誌の心のない功名心が、折角の面白い夢を潰してしまったのが残念でならない。」[98] と述べる。

保たれてきた沼の匿名性を破壊し、天野という一個人に名乗りを上げさせたことが、「『家畜人ヤプー』事件」の結果である。その結果は森下が想起していたように、沼は現実に存在する一個人ではあったが、森下が主張してきた倉田ではなかった。さらには、大衆に沼は一個人だと認識させたため、「テクストとしての沼正三」が内包する「大人のアソビ」を楽しむ可能性をも奪ってしまった。だが、名乗り出て以降も天野が注意深く自身と沼の間に距離をとってきたのは、同事件によ

って中断させられた「面白い夢」を再開させるようとする試みだったのかもしれない。

ミシェル・フーコーは、言説におけるある種の様態を特徴づけるものとして、作者名の有する機能を指摘したうえで、「作者名と固有名詞のように言説から言説を産出した外部にいる個人へと向かうのではなく、いわばテクストの境界を走り、テクスト群を輪郭付けて浮き上がらせ、その視線を辿って、その存在様態を顕示する、あるいはすくなくともその存在の様態を決定づけるという考え方に。」[99]と述べる。「続・家畜人ヤプー」を、自身のエッセイと同時に『S&Mスナイパー』に連載していた当時の天野が、「沼正三」と「天野哲夫」という２つの作者名を用いていたのは、フーコーが指摘した点を意識していたためかもしれない。

名乗り出て以降も『ヤプー』に関する言説を記す際に、天野が「沼正三」という作者名にこだわり続けるのは、やはり『ヤプー』は「沼正三」という作者名を持つ夢想家の名を戴くことによって特徴づけられる言説であり、テクスト上のマゾヒストである沼と、体当たりの実践を主とするマゾヒストである天野自身を混同することは、これまで『ヤプー』を、さらには「テクストとしての沼正三」をも特徴づけてきた「言説の様態」を崩す危険を避けるためかもしれない。

――結論

「『家畜人ヤプー』事件」は、本来はテクストとして構築されてきた沼正三に相当する人物が、現実世界に存在しているという錯覚に基づく騒動であった。ここでは作者と作品のあり方を巡る読者の姿勢という問題が生じてくる。また、沼の正体を巡る議論は代理人天野哲夫の死後も、なんらかの形で繰り返されるかもしれないが、それは同事件の焼き直しになるかもしれない。

本論において、私は沼をテクストとして論じ、沼を天野として、また天野を沼として端的に語ることを重視してきた。これはかつて天野の名義で出版された著作が沼の名義で再刊され、あたかもそれが沼の著作であるという風に語られる昨今の状況に対する批判の意味を込めているためである。私は天野という独立した作家の、沼とは関わりのない部分の多くが沼の覆面を被され、本来は天野のとして語られるべき部分が沼のものとして語られることによって天野の存在がぼやけてしまうことや、沼の神秘性に齟齬をきたしてしまうことに危機感を抱いている。

残念ながら天野は他界してしまったが、沼という覆面作家は、『ある夢想家の手帖』からや『ヤプー』、そして幾多にわたって書かれてきた「あとがき」によって構成される虚構の物語、あるいはテクストとして存在し続けるであろう。本論では「沼正三」の正体を巡る過去の議論をまとめ直し、沼と「『家畜人ヤプー』事件」について、ひとつの視座を提供してきた。また、沼の代理人あるいは沼自身として、その人跡や思想に関して体系的な言及がされてこなかった天野のマゾヒズムをまとめ直し、内容を論ずる際にも沼と天野の関係を巡る議論に振りまわされがちな『ヤプー』の、テクストそれ自体を論ずるための契機となりうるよう、議論を進めてきた。

『ヤプー』は非常に多面的なテクストであり、一例をあげるだけでもマゾヒズム文学、父権制とジェンダー、SFあるいはメタフィクション、風刺文学、そしてメルヒェンとい

った観点からも論じることができる。今後『ヤプー』を論じていく際、〈真の沼正三〉を巡る議論に振りまわされることなく、『ヤプー』を多面的に読むと同時に「テクストとしての沼正三」もまた、より深く読まれていくことを私は期待している。

《注》

1）安東泉, 1970, 70頁。

2）和田博文, 2001などは『家畜人ヤプー』のみを論じる稀有な例である。

3）巽孝之, 1992, 89頁。

4）巽は沼の正体を巡る議論は、マスコミの主導によって引き起こされ、作品とは無関係のものであると指摘する（同前, 89-90頁）。

5）『奇譚クラブ』, 1953年4月号, 23-26頁。

6）『奇譚クラブ』, 1953, 5月号, 28頁。

7）沼, 1971b, 203-204頁。

8）天野が名乗り出た際「実在の文献紹介が克明に報告してあったりするのが実は創作であり、架空の小説のように面白おかしく述べるくだりが実は貴重な文献を踏まえたものであったり、沼正三は投稿者各位の協力をも得ながら、悪戯の限りを尽くした……どこが実でどこが虚であるか、読書人士に絵解きをしていただける楽しみも籠められていた。」（天野, 1983a, 152頁）と述べることからも、ズンプの虚構性を裏付けることができる

9）本論では、表現意識を持つ作家によって、少なくない読者や文壇人に閲覧してもらうことを前提に書かれたもの、あるいは、「俗流の社会学主義と審美主義がひとつになって呼び求める文学的支配力」（ジュリア・クリステヴァ, 1983, 18頁）に囚われたままにあるテクストと定義している。

　ミシェル・フーコーは「《文学的な》言説は機能としての作者を付与されたかたちでしか、もはや受け入れられない。詩やフィクションのいかなるテクストに対しても、人びとは、それが何処から来たか、だれが書いたのか、いかなる日付に、いかなる状況で、あるいはどのような企てに発して書かれたのかと問いかけるでしょう。人びとがそれに与える意味、人びとがそれに認める位置あるいは価値は、人びとがこうした問いに答える仕方にかかってくるのです。そしてなにかある偶発的な出来事のためにせよ明白に作者の意志によるにせよ、それが匿名の状態でわれわれに届いてくると、作者を発見しようとする文学上の匿名性はわれわれには耐えられないのです。われわれはそれを謎というかたちでしか容認しないのです。（引用者注:言説における、ある種の様態を特徴づける）機能としての作者は今日文学作品に対して全的に作用しています。」（ミシェル・フーコー, 2006, 393頁）――ただし、「こうしたことすべては画一的に断定してはならない」（同前）という警句を発しながら――と述べる。

10）天野, 1971, 286頁より引用。

11）同前, 288頁。

12）文学的要素とは、「特定の記号実践」（クリステヴァ, 1982, 52頁）であり、私は『ヤプー』というフェノ-テクストを、様々な観点からジュノ-テクストとして批評するための足がかりにすべきだと考えている。

13）沼, 1970, 92-129頁＝沼, 1998, 93-122頁を参照。また『ヤプー』では、白人崇拝が「白神信仰（アルビニズム）」とも呼ばれている。

14）「下降願望」は、沼が「スクビズム」と呼ぶ自己卑下意識を指す。天野, 1998a, 143-144頁, 沼, 1976e, 117-152頁＝沼, 1998b, 219-245頁を参照。

15）沼, 1970, 「あとがき」『家畜人ヤプー　改訂増補限定版』。天野, 1970, 38頁より引用。

16）同前, 30頁。

17）沼, 1971a, 33頁。

18）1959年9月号まで、約20回（第27章まで）にわたって連載した後に中絶される。中絶の経緯は小山鉄郎, 1991, 257頁を参照。

19）この働きかけによって、天野は沼の代理人としての活動を行うようになる （天野1983a, 154頁）。

20）康芳夫, 2005, 269頁。

21）天野, 1983a, 154頁。小山, 1991, 257頁。

22）天野, 1983a, 155頁。

23）同前。
24）康, 1974, 92頁。
25）天野, 1998a, 175-179頁、天野, 1991=2000, 286-305頁を参照。
26）同前, 289頁。
27）「ヤプーの館」が開館された経緯については天野, 1998b, 170頁を参照。
28）康, 2005, 272頁などを参照。
29）天野, 1988, 201頁。
30）竹熊健太郎, 2007, 61-62頁。
31）康は、襲撃を行った右翼が金や売名を目的とするものだという確信があったと述べる（同前）。さらに康は、襲撃事件を新聞メディアに流し、『ヤプー』の宣伝に利用した（康, 2005, 273頁）。康, 1974, 89-93頁も参照。
32）倉田, 2006, 299-300頁。
33）マゾヒスティックな諧謔趣味は「不敬」と一瞥できるだろうか。沼はマルキ・ド・サドの作品における神聖冒涜と、日本における神聖を象徴する天皇への不敬の中にマゾ的な快楽を見出すということを述べながら、深沢七郎の『風流夢譚』について、「『風流夢譚』は日本革命の幻想としての皇族処刑を描いた。夢に仮託しての荒唐無稽がドギツサを緩和しているとはいえ、不敬の意図は明瞭で、右翼の反発を招いた。／私はこの作品（単行本化されず〈中央公論〉の切り抜きしかないが）を読んだときの、異常な嫌悪感と、他方、それに伴うM的快感とを忘れることができない。」（沼1971b, 570-571頁）と言及する。加えて、「『美智子妃殿下の首がスッテンコロコロカラカラと金属製の音がして転がっていった』りする場面では、敬愛尊崇の対象の破壊が、自虐のM的快感に化し、これが一方での嫌悪感を超克するほどの強さに傾いているのを感じた。……私自身についていえば、美智子妃への敬愛が右の快感の源泉であることは疑えない。」（同前）と述べる。
34）「沼正三の正体は、私と沼正三しか知らない。それに加えて三島由紀夫だ、とか、いや澁澤龍彦だろうなどと根拠のない噂も広まり、覆面作家という神秘性がおおいに話題を盛りあげたのだ。」（康, 2005, 270頁）。また、康は天野の死によせての談話の中で、倉田が沼に関わっていたことを認めつつ、その他にも沼に関わっていた協力者の存在を仄めかしている（康, 2009, 256頁）。
35）天野, 1983, 299頁。天野は「小説 沼正三」について「筆者は嵐山光三郎くんである。だが、そのネタ元すべては、森下君提供のものである。」（同前）と指摘する。
36）同前, 150頁。読売新聞の記事では、沼という覆面作家の正体として有力候補にあがっていた天野が倉田との交友関係があると認めながらも、倉田を沼と見なす世間の誤解を解くべく、天野自身が作者だということを近く明らかにすると述べたと報じられた（読売新聞, 1982）。
　朝日新聞の記事は、匿名の意味に重点が置かれている――「『マゾ作家』がじつは『エリート裁判官』だったという『意外性』だけが強調されるかぎりは、空しい論争に終わるだろう。むしろ問題はなぜこの小説が匿名で書かれなければなせなかったか、ということにある。少なくとも今日の日本では、真の作者が『書いたのは私だ』と告白しえないだろうという点にこそ、この恐るべき名著の特徴があるはずだ。」（朝日新聞, 1982）。
37）森下, 1982a, 222頁。
38）同前, 227頁。
39）同前, 242頁。
40）倉田, 2006, 299頁。森下の議論では、官職に就く倉田に対する憎悪（注44）がある一方、沼（=倉田）を神格化しようとする不自然な称賛が見て取れる。
41）森下, 1982b, 141頁。しかし、天野は『ヤプー』の文学的価値を称える森下を「森下君は。10年前には『ヤプー』をあまり評価していなかったではないか。それが今にして、かくも熱烈な賛美派に一変したとは、一驚に値する。」（天野, 1983a, 158頁）と批判する。
42）同前。とはいえ森下の記事は、関係者や『ヤプー』の読者に大きな衝撃を与えた――「（引用者注:『諸君！』11月号の記事で名指しされ）倉田さんは全面否定、代理人の天野さんは倉田さんへの影響も配慮して『近く私が作者であることを明らかにする』と読売新聞で語っている。この時も天野説支持派と天野説疑問派とに意見

が別れたようだ。」（小山, 1991, 257頁）。

43）倉田, 2006, 291頁。

44）天野は『諸君!』の編集長（当時）堤暁が森下を扇動していたことを指摘し、「堤君と親しい某氏によれば、『必ずK氏を公職より引きずり降ろしてみせる』と彼は豪語している」（天野, 1983a, 157頁）と述べる。また倉田は、猥褻図画の販売によって警察に目をつけられた森下が、文通の中で裁判所と裁判官に対する悪意を書き立てることに危機感を抱きつつ、日本の裁判所における「猥褻」概念の厳しさに懐疑的な倉田は森下に対する同情の念を抱きながらも、森下が判事という倉田の正体を知った際のことを考えて、一方的に文通を打ち切った（倉田, 2006, 289-290頁）。

45）「『家畜人ヤプー』事件」が1982年に起こった理由として、1972年に『ヤプー』の文庫版が発刊され、これまで以上に大きな話題となったことや、同文庫版にイザヤ・ベンダサンが筆名をテーマにした解説を寄せ、筆名を持つ作者と現実の人物は別人として捉えられるべきだというような論を展開したことがあげられるかもしれない。森下は、テクストあるいはエクリチュールの孤立性を主張するベンダサンに反発する意味で一連の記事を記したのかもしれないが、森下の怨敵ともいうべき裁判官の役職から倉田を引きずり下ろすため、『ヤプー』がより広く普及する契機を、森下を扇動した堤と共に窺っていた可能性もある（注44を参照）。

46）「私の窮状を察して、本人Aが『沼というのは私です』と名乗りを上げたが、メディアはやはり東京高裁判事を作者にしたいらしく、新聞紙や週刊誌があちこち取材した記事が続いた」（倉田, 2006, 291頁）。

47）天野は「私の代理人卑下意識からする沼正三本人実在の疑制化が森下君の錯覚と競合し、虚構ながら独り歩きを始めて、見当違いのK氏に累を及ぼした。それが今回の事件である。K氏は否定し、私が名乗った。どこにも不都合はないのである。本来、名乗ろうが名乗るまいが、無関係な第三者には余計なお節介ではないか。（……）いかなる理由付けをしようと、私信やプライバシーの、為にする公開は、男子ならずとも、最も恥ずべき行為であり、それを煽り立てた『諸君！』のやり方は、言論の自由に泥を塗る、破廉恥な行為の極みである。」。（天野, 1983a, 160頁）と、厳しい批判を展開する。

48）沼, 1991, 248頁。

49）沼, 1999e, 365-366頁より引用。

50）沼, 1993a-c。

51）同前, 376頁。

52）沼, 2003, 1頁。

53）同前。矢川澄子は沼にあてたエッセイを記している（矢川澄子, 1981）。

54）倉田, 2006, 296-297頁。倉田の考察もまた、『ヤプー』に付与された新たな伝説であるが、『ヤプー』伝説の根本には常に三島の暗躍があったことを念頭に置きながら、「小説の構想を実際にまとめ上げていくのは、予想以上に至難の業であった。ために、幾たびも、K氏を含め先輩畏友の意見を叩き、原稿の批判を仰ぎもした。」（天野, 1983a, 153頁）という天野の一節を読むと、「先輩畏友」の中に、『奇譚クラブ』の愛読者でもあった三島が匿名氏として関わっていた可能性を否定することはできない。

55）読売新聞は「戦後を代表する奇書『家畜人ヤプー』の作者とされる天野哲夫氏（あまの・てつお）氏が11月30日死去した。（……）沼正三の筆名で刊行された『ヤプー』は、2000年後の白人帝国で、日本人が家畜となって白人に奉仕するという小説。（……）。」と報じ、朝日新聞は「天野　哲夫（あまの・てつお=著述家）11月30日、肺炎で死去。（……）新潮社に勤務しながら執筆活動を続け、戦後の奇書として知られる小説『家畜人ヤプー』を書いた覆面作家・沼正三氏の「代理人」を務めた。後に『ヤプー』の著者は自分だと名乗り、論争を巻き起こした。」と報じる。また、毎日新聞は「戦後最大の奇書とうたわれた『家畜人ヤプー』の作者とされた著述家、天野哲夫（あまの・てつお）さんが11月30日、肺炎のため東京都内で死去した。（……）『家畜人ヤプー』は、雑誌『奇譚クラブ』に沼正三の筆名で連載され、70年に刊行された。（……）作者の正体をめぐり諸説あったが、天野さんが自分が書いたと名乗り出ていた。」と報じた。

56）天野1997, 229-231頁。
57）1988年から90年代後半にわたる連載の一部は天野, 1998a-b にまとめられている。
58）志賀信夫, 2006を改題して再録したもの。沼, 2009a, 12-19頁。
59）『マゾヒストMの遺言』に収められた作品は、「『家畜人ヤプー』について」以外は全て天野名義で書かれたものである。
60）天野, 1999, 208-209頁などを参照。
61）天野, 1983a, 136頁。
62）同前, 138頁。
63）天野, 1993a, 138頁。
64）天野, 1998b, 75章、82章を参照。
65）沼, 1970, 183-184頁。
66）同作では知愚の弟の家庭教師を頼むM氏が登場するが、M氏の弟は、ジキルとハイドの如くM氏が変貌した姿として描かれている。家庭教師の下りは倉橋の創作ではなく、天野の実践に基づくものである（天野, 1999, 63-110頁を参照）。「倉橋由美子さんの『マゾヒストM氏の肖像』《文学界》は、こういう一人二役のマゾヒスト（引用者注：アルバート・モルが『性倒錯研究寄与』で紹介した症例）を扱ったものとして、特に、女性の目で、その生態を観察した作品として、注目に値するものである。」（沼, 1972b, 272頁）。しかし、倉橋がマゾヒストを変態ないしは怪物として（勿論、娯楽性を追求した趣もあろうが）、醜悪さを過剰に描きすぎている面は否定できない――倉橋, 1970b＝1976, 36-7頁を参照。
67）同前, 34頁。
68）生態便器「肉便器（セッチン）」の例は7章3節「ある肉便器（セッチン）の個体史」、馬あるいは天馬（ペガサス）として使役される「畜人馬（ヤップホース）」については15章3節「畜人馬（ヤップホース）アマディオ」で、神的存在たる白人に〈使用される〉道具として生きることや存在することに対する思弁が展開される。2匹の畜人（ヤプー）は、それぞれ「便器」と「馬」という役割を受け入れると同時に、女神たる白人女性に奉仕する行為に自らを馴致させていく。特に人間としての自我が崩壊させられていく過程を淡々と描くアマディオの例は、「『奴隷になりたい』ということより、『奴隷におなり』という有無を言わせぬ強制あってこそ、マゾヒストはマゾヒストたりうるのであって、『奴隷になりたい』『奴隷にしてください』なぞとは、なんと甘ったれた言い草であろう。『婦人の手中に否応なく売り渡された』逃げる自由のない境涯は選択できぬ運命として甘受すべきではないのか。」（天野, 1991, 174頁）という言葉に、マゾヒスティックに共鳴する。
69）沼, 1970, 82頁。
70）天野, 1991, 165頁。
71）沼, 1970, 11頁。
72）同前, 12頁。
73）「私の生まれも育ちは九州は筑前・博多である。九州の兵隊は日本軍でも最強の部隊を構成する。九州は、どこよりも男くさい地方であった。九州男児と呼ばれ、剣道に柔道の猛者が輩出する尚武の地方なのであった。／あの時代、そして九州というこうした土地柄に、なぜ私のようなマゾヒストが生まれ育ったのかはまことに皮肉な現象に思える。」（天野, 1998a, 98頁）。
74）河井隼雄, 鶴見俊介, 埴谷雄隆, 2005, 120-121頁。
75）天野, 1998b, 58頁。
76）天野, 1999, 146頁などを参照。
77）これは「全権プロデューサーとして沼正三から全てをまかされ」（康, 2005, 273頁）ている康の戦略であるかもしれない。そして、（私を含めて）沼の正体を論ずる者は「今は（引用者注：『家畜人ヤプー』の）ロシア語とトルコ語の翻訳が進んでいます。だから無限増殖です。沼さんが亡くなった後も、僕は彼の全権代理人として、ますます『家畜人ヤプー』の歴史を複雑怪奇にしていきますよ。」（康, 2009, 257頁）と述べる康の魔術に絡め取られている。
78）沼, 2008a, 5頁。文庫版の『禁じられた青春』は、著者名が「沼正三」であり、その内容は半自伝的小説であるため、書かれた内容が沼の人跡だと誤解する人がいるかもしれない。だが、同書の主人公「沼倉正三」（単行本の時点より同名）は商業高校を卒業後に就職で満州に渡った後、徴兵で福岡の連帯に配属され、訓練に励む最中に8月15日を迎え、訓練所の校庭で玉音放送を耳にする。そのため、同書が沼の半生を題材にしたものだという誤解を解かなければ、外地で捕虜にされ、白人女性に辱めを受けることで

白神主義（アルビニズム）とマゾヒズムに目覚めたという沼の過去に矛盾が生じてしまう。

79）巽, 1992, 88頁。

80）ロバート・シルヴァーバーグ, 1987, 11頁。

81）同前, 14-15頁。

82）注44, 45を参照。

83）ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア, 1987, 175頁。

84）同前, 187-188頁。

85）同前, 215頁。

86）ティプトリーとシルヴァーバーグのやりとりは友好的なものであった。

87）天野, 1983a, 151頁。

88）同前, 152頁。

89）同前。

90）「安東泉」の名では文学作品に関する批評、「水尾究」ではマゾヒズムの実践に則した連載エッセイ、そして「麻生哲郎」としては、SFとマゾヒズムが混在した連載小説を発表してきた。沼, 1976c,307-308頁も参照されたし。

91）「正編のあとがきで、私はこう記した。『法律・裁判、経済・貨幣・税制、軍隊・警察、教育・医療・教会、演劇・スポーツ（……）イース世界百般の社会事象に関し、述べるべくして述べていないことは多いのである』と。このへんてこな小説の真の主人公は、クララでも麟一郎でもなくて、人種偏見と男性差別を制度化した百太陽帝国EHSである。」（沼, 1991。沼, 1999, 361頁より引用）と述べるのと同様、天野が描き出す「汚辱の世界」における主体は、『ヤプー』の真の主人公が制度としてのマゾヒズムを備え、その制度の下で様々な文化風俗を発展させてきたイース帝国であるように、「汚辱の世界」そのものだと私は考えている。

92）巽, 1992, 90頁。

93）天野, 1983a, 156頁。「《文学的》フィクションのいかなるテクストに対しても、人びとは、それが何処から来たか、だれが書いたのか、いかなる日付に、いかなる状況で、あるいはどのような企てに発して書かれたのかと問いかけるでしょう。人びとがそれに与える意味、人びとがそれに認める位置にある価値は、人びとがこうして問いに答える仕方にかかってくるのです。」（フーコー, 2006, 393頁）

94）沼, 1970。安藤泉, 1970, 28頁より引用。

95）『完結編』の「あとがき」では、「私の目には、日本は45年前と同様、米国の傘の下の事実上の属国と映る。……〈真善（特に）美〉の価値基準も西洋にあるからこそ、万事に欧米の流行を追い、怪しげなカタカナ語が氾濫し、テレビのコマーシャルの半ばは『白人』男女に占領されている。昔の欧米植民地並みだ。（……）今の地球的規模での黄禍論議に返す言葉を持たぬまま、浮薄な金力に浮かれていては、驕る者久しからず。〈金満国〉日本の増上慢が白人諸国の怒りに触れ、報復され、再び転落衰亡への道を歩むことにならぬよう祈るばかりだ。」（沼, 1991。沼, 1999, 356-357頁より引用）と、バブル景気に浮き足立つ日本人を批判する。

96）天野, 1983。沼, 1999, 353頁より引用。

97）これは現実世界には真の沼が、天野の他に存在していると考える側と、天野こそが真の沼だと考える側に共通するものである。志賀は「2008年11月、沼正三（天野哲夫）が亡くなった。『家畜人ヤプー』の著者・沼正三の正体は半世紀にわたる謎だったが、2005年、最有力候補の元倉田判事がその関わりを詳しく発表したことで（引用者注:1983年の段階で、沼を取り巻く天野と倉田との関わりは明らかにされている）、天野哲夫と確定した。それでも執拗な攻撃者や素人の推測がネットに氾濫している。しかし、天野はそれを喜んでいるかも知れない。」（志賀, 2009, 1頁）と述べるが、志賀の指摘には数多くの不備がある――私が本論を通じて繰り返してきた、〈なぜ沼が現実の一個人である必要があるのか〉という点を注視することなく、森下と同様、現実の一個人を〈真の沼〉として担ぎ上げんとする気負いを感じてしまう。

98）天野, 1983b, i 頁。

99）フーコー, 2006, 389-390頁。

《参考・引用文献》

天野哲夫, 1970a, 「快楽論とマゾヒズム――沼正三の場合」『えろちか』, 1970年8月号, 23-33頁, 三崎書房。
――1970b, 「『家畜人ヤプー』の詩と夢　マゾ理解で食い違う倉橋由美子氏への反論」『別冊潮』, 1970年7月号, 285-293頁, 潮出版。
――1971, 「『ヤプー』騒ぎの火付け役」『潮』, 1971年9月号, 167-172頁, 潮出版。
――1972=1991, 「K女史の肖像」, 天野, 1991c, 163-205頁。
――1973a, 『女帝ジャックリーンの降臨』, 立風書房。
――（編著）, 1973b, 『異嗜食的作家論』, 芳賀書店。
――（編著）, 1973c, 『禁じられた女性崇拝』, 芳賀書店
――1981, 『女神の住む闇』, 出帆新社。
――1983a,「『家畜人ヤプー』贓物譚　『諸君！』よ諸君、何ぞの愚昧なる！」『潮』, 1983年1月号, 150-160頁, 潮出版。
――1983b, 「残念ながら名乗り出て」, 石森章太郎 1983, 『劇画:家畜人ヤプー　最新版』, i 頁, 辰巳出版。
――1987b, 「くりごと」『禁じられた青春』, 409-412頁, 創樹社。
――1991a, 『禁じられた青春』（上）, 葦書房。
――1991b, 『禁じられた青春』（下）, 葦書房。
――1991c, 『女神のストッキング　エロスの反宇宙』, 工作舎。
――1992=2000, 「顔を隠す快感」『変態さんが行く』, 286-305頁, 2000, 宝島社。
――1995, 『女性幻譚 骷髏（クウロウ）』, 二見書房。
――1997, 『勝手口から覗いた文壇人』, 第三書館。
――1998a, 『女主人の鞍　ある異端者の随想録Ⅰ』, 第三書館。
――1998b, 『三者関係の罠　ある異端者の随想録Ⅱ』, 第三書館。
――1998c, 「沼正三のはしがきにそえて」, 沼正三, 1998, 11-13頁。
――1999, 『我が汚辱の世界』, 毎日新聞社。
――2001, 『犬になった老人の死』, リブロポート。
安東泉, 1969, 「原理としてのマゾヒズム　<家畜人ヤプー>の考察」『血と薔薇』, 1969年第4号, 274-280頁, 天声出版。
――1970, 「『家畜人ヤプー』について」『えろちか』, 1970年6月号, 63-70頁, 三崎書房。
朝日新聞, 1982年10月9日（夕刊）。
――2008年12月4日。
ベンダサン・イザヤ, 1972,「ヤプーによせるひとつの印象――著書と著者――」, 沼, 1972, 646-652頁。
Foucault, Michel, 1969, “Qu’est-ce qu’un auteur”, *Bulletin de la Sociètè française de philosophie*, 63e annè, no3, julliet-septembre, pp.73-104, Vrin: Paris.（ミシェル・フーコー, 2006, 「作者とは何か」『フーコーコレクション2　侵犯』,（訳）清水徹・根本美作子, 371-436頁, 筑摩書房）。
後藤繁雄, 2001, 「沼正三」『独特老人』, 470-493頁, 筑摩書房。
平岡正章, 1996, 「ヤプーとの出会い」『変態的』, 212-223頁, ビレッジセンター出版局。
鎌田東二, 1989,「沼正三／家畜人ヤプー　被虐のユートピア」『国文学 解釈と教材の研究』, 12月号, 118-121頁, 至文堂。
河井隼雄, 鶴見俊介, 埴谷雄隆, 2005, 「未完の大作『死霊』は宇宙人へのメッセージ」, 鶴見俊輔, 2005, 『埴谷雄高』, 87-128頁, 講談社。
康芳夫, 1974, 『虚業家宣言 クレイをKOした毛沢東商法』, 双葉社。
――2005, 『虚人魁人 康芳夫 国際暗黒プロデューサーの自伝』, 学研。
――2009, 「『家畜人ヤプー』秘話――沼正三氏の死に際し」『新潮』, 2009年2月号, 254-257頁, 新潮社。
小山鉄郎, 1991, 「沼正三　会見記」『文学界』, 1991年13号, 256-259頁, 文藝春秋。
「奇書『家畜人ヤプー』覆面作家はどちら？」, 『読売新聞』, 1982年10月2日, 夕刊。
Kristeva, Julia, *Sèmèiotikè: recherches pour une sémanalyse*, Seuil: Paris.（ジュリア・クリステヴァ, 1983, 『記号の解体学――セメイオチケ1』,（訳）原田邦夫, せりか書房）。
――*Sèmèiotikè: recherches pour une sémanalyse,* Seuil: Paris.（1984, 『記号の生成論――セメイオチケ2』,（訳）中沢新一 他, せりか書房）。
倉橋由美子, 1970a, 「神と人間と家畜」『都市』,

1970年2号, 171-174頁, 都市出版社。
——1970b=1976, 「マゾヒストM氏の肖像」『倉橋由美子 全作品8』, 1976, 8-38頁, 新潮社。
倉田卓次, 2006, 「『家畜人ヤプー』事件」『続々・裁判官の戦後史——老法曹の思い出話』, 285-307頁, 悠々社。
毎日新聞, 2008年12月4日。
森下小太郎, 1982a, 「『家畜人ヤプー』の覆面作家は東京高裁・倉田卓次判事——三島由紀夫が絶讃した戦後の一大奇書」『諸君！』, 1982年11月号, 220-242頁, 文藝春秋。
——1982b, 「「家畜人ヤプー」事件第2弾——倉田卓次判事への公開質問状」『諸君!』, 1982年12月号, 134-141頁, 文芸春秋。
——1983, 「沼正三からの手紙」『諸君!』, 1983年1月号, 147-153頁, 文芸春秋。
沼聖子, 1980, 『新・創世記 地球を制覇する女神たち』, 角川書店。
沼正三, 1970, 『ある夢想家の手帳から1』, 都市出版社。
——1971a, 『ある夢想家の手帳から2』, 都市出版社。
——1971b, 『ある夢想家の手帳から3』, 都市出版社。
——1972, 『家畜人ヤプー』, 角川書店。
——1975, 『ある夢想家の手帖から1　金髪のドミナ』, 潮出版社。
——1976a, 『ある夢想家の手帖から2　家畜への変身』, 潮出版社。
——1976b, 『ある夢想家の手帖から3　おまる幻想』, 潮出版社。
——1976c, 『ある夢想家の手帖から4　奴隷の歓喜』, 潮出版社。
——1976d, 『ある夢想家の手帖から5　女性上位願望』, 潮出版社。
——1976e, 『ある夢想家の手帖から6　黒女皇』, 潮出版社。
——1991, 「連載を終えて」『S&Mスナイパー』3月号, 248-249頁, ミリオン出版。
——1992, 「はしがき」『家畜人ヤプー　改訂増補復刻版』, i -ii頁, スコラ。
——1993a, 『家畜人ヤプー（上）ポーリーンの巻』, 太田出版。
——1993b, 『家畜人ヤプー（中）アンナ・テラスの巻』, 太田出版。
——1993c, 『家畜人ヤプー（下）ドリスとクララの巻』, 太田出版。
——1998a, 『集成「ある夢想家の手帖から」』（上）, 太田出版。
——1998b, 『集成「ある夢想家の手帖から」』（下）, 太田出版。
——1999, 『家畜人ヤプー』（5）, 幻冬舎。
——2003, 「家畜人ヤプーについて」『マゾヒストMの遺言』, 1-16頁, 筑摩書房。
——2008a, 『禁じられた青春』（上）, 幻冬舎。
——2009a, 『懺悔録　我は如何にしてマゾヒストになりし乎』, ポット出版。
——2009b, 『異嗜食的作家論』, 現代書館。
志賀信夫, 2006, 「沼正三マゾヒズムを語る」『奴隷の詩学 マゾヒズムからメイド喫茶まで……奴隷になることの詩学』, 65-72頁, アトリエサード。
——2009, 「マゾヒズムの星」, 沼正三, 2009a, 2-3頁。
Silverberg, Robert, 1975, “who is Tiptree, what is He?”, Tiptree, James Jr.,1975.（シルヴァーバーグ・ロバート, 1987, 「ティプトリーとはだれ、はたまた何者？」, （訳）浅倉久志, ティプトリー・ジェイムズ・ジュニア, 1987, 7-20頁）。
田中美代子, 1973a, 「沼正三論——マゾヒズムに関するサディスティックな考察——」『都市 別冊』, 52-60頁, 都市出版社。
——1973b, 「正統意識の告発」『早稲田文学』, 1973年8月号, 78-81頁, 早稲田文学会。
竹熊健太郎, 2007, 『箆棒な人々——戦後サブカルチャー偉人伝』, 河出書房新社。
種村季弘, 1998, 「集団給食のエロティシズム」『幻想のエロス　種村季弘のネオ・ラビリントス4』, 121-123頁, 河出書房新社。
Tiptree, James Jr.,1973, “The Girl Who Was Plugged in” *Warm Worlds and Otherwise*, 1975, Ballantine Books: New York.（ティプトリー・ジェイムズ・ジュニア, 1987, 「接続された女」（訳）浅倉久志,『愛はさだめ、さだめは死』（訳）浅倉久・伊藤典男, 153-220頁, 早川書房）。
巽孝之, 1992, 「畜権神授説 沼正三『家畜人ヤプー』を読む」『現代思想』, 1992年4月号, 88-101頁, 青土社。
——1998, 『日本変流文学』, 新潮社。

——2001, 『メタフィクションの思想』, 筑摩書房。
——2006, *Full Metal Apache Transactions between Cyber Punk Japan and Avant-Pop America*, Duke University Press: Durham and London.
「右翼の機嫌を損じた小説『家畜人ヤプー』ダイジェスト」『週刊新潮』, 1970年7月18日号, 新潮社。
矢川澄子, 1981, 「一架空作家への手紙」『反少女の灰皿』, 102-108頁, 新潮社。

［すずき　しんご・和光大学総合文化研究所特別研修員］